

「一年のはじまりにあたり」

岐阜高山教務所 海老原 章 教務所長

今年も、除夜の鐘の音と共に新年を迎えました。本年もよろしくお願いいたします。

昨年、ひだ御坊真宗教化センター発行の『センターだより』の原稿を書く機会を頂き、「戦後80年を迎えて」という中で沖縄について記させていただきました。

20世紀は戦争の世紀であったといわれていますが、現在を生きる私たちは、今をどう生き、未来へどのような方向づけをしていくべきでしょうか。

戦争を知らない戦後生まれの世代が社会の中心的存在になってかなりの年月が経過していますが、戦争の記憶は、世代交代という大きな流れの中で風化していくことが危惧されています。

私も、戦後生まれの世代であります。思えば、今から20年程前に、本山の「組織部」という部署に2005年から2010年まで籍をおいており、2009年あたりから宗派の準開教区である「沖縄」を担当することとなり、その間、「東本願寺沖縄別院」設立にも携わることができました。

これまで私は一度も沖縄へ訪れたことがありませんでしたが、組織部次長時代になって初めて沖縄という地に行き、そこで沖縄開教本部が主催する「非戦平和沖縄研修会」や「成道会」、「日曜礼拝」など様々な行事に関わるようになりました。そういった場に身を置くことによって、多くのことを学ばせていただきました。と同時にそれは、単に沖縄という地を訪れたことがなかったから、知らなかった、分からなかったということだけではとどまらないもの。具体的には、私は同じ日本という国に住みながら、太平洋戦争末期に地上戦が繰り広げられた沖縄、その後もその沖縄における

「普天間飛行場」の移設等、戦争によって生み出された課題があることを知らされました。

沖縄のこと、戦争や歴史については何か自分とは関係のないものとしていた自分自身があぶりだされてきました。今でも依然として国と国との争いが各地で続いています。

一方、身近な事として私に目を向けてみると、これまでも常に自身に降りかかった問題には声を荒げ、正しいと主張し、我を通してしまっている自分がいます。その一方で、他人の問題の時には気づかずにいます。どこまでいっても自己中心的な在り方に気づかない私がいます。

金子大栄先生の「浄土とは、互いに拌み合う生活である」との言葉が思い起されます。

今回のセンターだよりの原稿を書く中で、以前に沖縄という地に関わらせていただいたことによって、沖縄のことだけにはとどまらない事柄、自分自身とは関係のないものとしてしまっていたことに気づかせていただいたことが、鮮明に蘇ってまいりました。中途半端に生きている自分自身の「あり方」が厳しく問われていると思ったことを記憶しております。新しい年を迎え、あらたに日々何事にも謙虚でありたいと心に刻んでまいりたく存じます。

岐阜高山教区では、一応の方向性としまして、来る2028年に「岐阜高山教区宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」をお迎えすべく話が進められています。

皆様とともに歩みをしてまいりたく、本年も何卒よろしくお願い申し上げます。